フランスの 親である ことの支援 ①

安發（あわ）　明子

中学校の公民の教科書に「日本は平等な国と言われている」と書かれていたことが衝撃的でした。

1990年代、地元川崎には風呂や鍵や電話がない、夏も冬も一着しか服がない暮らしをしている友達がいるのに対し、私が入った都内の私立中学には、電車に乗ったことも店で買い物をしたり、お金を触ったこともない同級生がいました。地元の友達が車上生活を送り、中絶を繰り返し、アルコール依存症になる一方で、私立中学の同級生は弁護士や医者になっていきました。

全ての子どもにチャンスがあって、自分のしたいことを実現していくことができる。そんな世の中になってほしいと、児童保護分野に関心を持つようになりました。

子に同じ機会・権利を

左側の吹き出し「行きなよ、まっすぐだから!」「もっといい方法ないの?」。道の途中の案内板に各種児童福祉関連機関がある。右の道には応援や補給が（フランス共和国公式ジャーナル表紙、2018年）

整わない環境の中で子どもが苦しみを抱え、エネルギーを奪われ、自分の幸せを築く余裕のないまま子ども時代を終えるような社会は平等とはいえない。そのようなことを、日本とスイスの施設で暮らす子どもから見た未来や世界観についての本『親なき子　北海道家庭学校ルポ』（出版社・金曜日）に書きました。（ペンネーム島津あき）

10年前フランスに来ました。好きなところの一つは、お金をかけずに子どもを産み育てることができ、教育を受けることができるところです。

不妊治療、妊娠検査、出産費用は無料。3カ月からの保育は収入の1割、3歳からは無料の義務教育、大学・大学院も年間授業料は3万円です。奨学金は返済の必要はなく、専門学校や習い事、生涯学習も無料のものがいくつもあります。

当初の目的ではなかったのに、私は不妊治療で子どもを授かり、大学院に通うことができ、子どもも学問・キャリアもフランスからの頂き物だと感じています。

フランスの児童保護の国家戦略のサブタイトルは「一人一人の子どもに同じチャンスと同じ権利を保証する」であり、冒頭に「子どもたちの well-being は国が守る」とあります。

フランスの福祉について伝えていきたいと思っています。

（パリ在住、通訳）

（金曜掲載）

フランスの 親である ことの支援 ②

安發（あわ）　明子

日本のニュースで、親に責任を押し付ける風潮を感じるたび、つらい気持ちになります。私自身、子育てについては専門職に言われて気づくことばかり。とてもいい親とは言えません。

フランスでの妊娠から子育ては常に専門職に囲まれて、助けてもらいながら過ごしていると感じています。

私たちが移民夫婦で家族も近くにいないことから、産科のソーシャルワーカーに妊娠中からの家事支援の派遣を提案されたり、本人さえ心配していなかったことについて情報提供を受けたりしました。

産後は処方箋に指示が出され、一日おきに助産師が来て一緒に赤ちゃんの世話をしました。

赤ちゃんの体重が一定に達してからは保健所のようなところに毎週通うよう言われ、気になることはインターネット検索ではなく私たちのことをよく知っている専門職に聞く習慣がつきました。

子のための親のケア

助産師による丁寧なサポートが支えに

何度も助けてもらうたびに自分が親として初心者であると思い知らされました。専門職というものへの信頼は、助けてもらった経験があるからこそ築かれると思います。

フランスでは、子どもの福祉を守るため専門職が時間軸においても空間軸においても、何重にも配置されています。産科、助産師の家庭訪問、保健所、3カ月半からの保育園にも3歳からの学校にも児童福祉の専門家がいます。親しくなった心理士さんなどはたびたび電話をくれて、自分では悩みがないと思っていても次々と子どもの気になった反応や夫婦関係についてなど話してしまい、とても支えられていると感じています。

誰しも思いつく限りの最善の行動をとっている、それでもそれぞれの歴史や状況により凸凹はあるのが人というもの。親というのは簡単なことではない。親が子どもをよりよく育てられるよう親を支えるという福祉が目指されています。

（パリ在住・通訳）

（金曜掲載）